

愛知・平手町遺跡

五世紀末頃)と推測される。

8 木簡の釈文・内容

(1)

「^(ボロ)^{ヨリ} (符籙) (九字) 川布

〔輔
カ〕

114×24×2 051

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1 所在地 | 愛知県名古屋市北区平手町一丁目 |
| 2 調査期間 | 第四次調査 二〇〇七年(平19)五月～一月 |
| 3 発掘機関 | 名古屋市教育委員会・国際航業株 |
| 4 調査担当者 | 桐山秀穂・東園千輝男・石田和哉・野澤則幸 |
| 5 遺跡の種類 | 集落跡・墓地 |
| 6 遺跡の年代 | 弥生時代中期～江戸時代 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

平手町遺跡は、庄内川左岸の自然堤防上に立地する。下層面では弥生時代中期～古墳時代、上層面では中世の時期が中心となる。

木簡の釈讀にあたっては、小林吉光氏及び名古屋市博物館の方々の教示を得た。

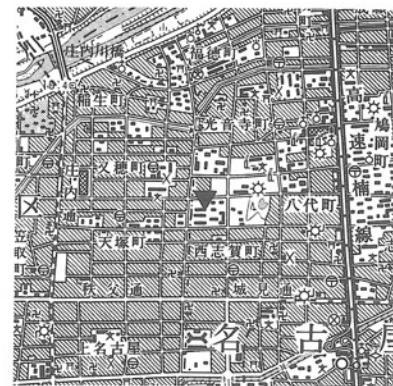
割書は、変体仮名で「つふふう」と判讀できようか。とすれば、古来「歴節風」と呼ばれ、室町時代から「痛風」と俗称された病をさし、本木簡は疾病除けのための呪符木簡である可能性が考えられる。

9 関係文献

名古屋市健康福祉局『平手町遺跡第四次発掘調査報告書』(二〇〇八年)

(桐山秀穂・石田和哉・野澤則幸)

層面では区画溝や道路、井戸、柱穴などの居館状の遺構群を検出している。



(名古屋北部)

木簡は、上層面の土坑S K〇八〇より、瀬戸美濃製の陶器などとともに一点出土した。木簡が埋められた年代は、瀬戸美濃製品の年代から、大窯第一段階(一



赤外